

社会学における環境論争の意味

～人間中心主義の超克とエコロジカル・イマジネーション～

平 田 毅

はじめに

本論で素描するテーマは、社会学における環境思想の位置づけ、とりわけ環境をめぐる主要な三つのパラダイムを「HEP/NEP 論争」を通して整理することにある。

米国で1960年代に誕生したとされる環境社会学は、近代社会学への根源的批判の学としてその存在意義があったといえる。それは、社会学そのものが人間特例主義パラダイムという基本的視座の上に安住している学であり、その視点からの真の環境問題解決は可能なのかという問題提起としてあった。これが「HEP/NEP 論争」とよばれるものである。

本論では、この論争のなかで提示され前提となっている環境主義の三つのパラダイムを整理し、近代社会学の「人間中心主義」を批判したNEP（新エコロジカル・パラダイム）の、思想的・哲学的支柱ともいえるべき「ディープ・エコロジー」の考え方とラディカル・エコロジーとの関連について検討を試みる。そこから導き出される問題提起としては、NEP それ自身も原初的な「人間中心主義」からは完全に解き放たれることは困難であろうということである。

そして、最後に、「新エコロジカル・パラダイム」においても内包されている「原初的な人間

中心主義」について、人間が「自然」を捉えるメカニズムを認識論的に考察したあと、「原初的な人間中心主義」を超克する視点として「エコロジカル・イマジネーション」の重要性を提起する段取りである。

しかし、これらすべての論証は、極めて大雑把であり、ノートの範囲を超えたものではないことは予め断っておく。

「HEP/NEP 論争」とは

社会学、とりわけ環境社会学における「HEP/NEP 論争」とは、社会(科)学的パースペクティブにおいて「新エコロジカル・パラダイム」(New Ecological Paradigm: NEP)の立場をとる環境主義社会学者が、従来の社会学ないし社会学者の基本的視座に対して、それを「人間特例主義パラダイム」(Human Exemptionalism Paradigm: HEP)であるとして批判したことに端を発する問題である。この批判はラディカルな意味を持っていた。

新エコロジカルパラダイムの立場をとる中心的論客は、アメリカの社会学者、キャットンやダンロップらである。

彼らの主張は、従来の、社会的な事象を対象とした分析研究の上に「自然」ないしは「環境」を単にどう位置付けるのかといった問題の立て

方を超克し、むしろ、主客を逆転させ、自然生態系の側(中)から人間社会のあり方を俎上にのせて分析していこうという問題としてあった。

すなわち、1960年代までの欧米の社会学(当時のアメリカ社会学は、パーソンズやマーソンの構造-機能主義の全盛期であったが)においては、自然環境はその理論的枠組みからほとんど無視されていた。彼らが「環境」を問題とすることがあったとしても、そこでの「環境」は自然環境そのものではなく、社会的状況との関わりで定義された、社会を説明するための与件としての一変数にしかすぎなかった。それは、環境問題を「社会現象」として、「社会的事実によって説明されるべきだ」とするデュルケム以来の社会学の伝統を継承したものであったし、人間社会と自然環境の関わりよりも、人間の文化的存在性を強調する人間中心主義的な傾向が強かったといえる。

こうした「環境」「自然」を無視ないしは軽視する従来の社会学のあり方を「新エコロジカル・パラダイム」に立脚する環境社会学者たちは厳しく批判したのである。ここに「HEP/NEP 論争」が展開されることとなる。

環境社会学の衰退と再生

1960年代後半から始まる環境主義運動高揚の波に乗って、1970年代半ばにアメリカで誕生した環境社会学は、「伝統的 sociology が人間存在の物理的・生物的・物質的基礎への関心を欠いてきた」ことへの批判から生まれた。それは、近代社会学が本質的に内包するモダニティや人間特例主義パラダイムそのものを根源的に批判するインパクトを持ったものであった。

しかし、こうした「新エコロジカル・パラダイム」に立脚した環境主義運動(「環境社会学」運動をも含む)は、1970年代後半から「冬の時代」をむかえる。その理由としては、反環境主義の立場を露骨に推し進めたロナルド・レーガン政権の登場と、環境主義運動の提起した根源的な問いかけが近代主義イデオロギーの中で生活する人々のリアリティを乗り越えきれなかったことにある。このことは、単に環境主義運動そのものを減速させたのみならず、近代主義的・資本主義的価値イデオロギー(豊かさ・個人主義・成長・進歩)による「揺さぶり」によって環境主義運動を分裂させるものでもあった。「近代」をラディカルに批判してきた環境主義が、その「近代」に再び呑み込まれていったのである。

こうした環境主義および環境社会学の閉塞状態を指して、バトルは次のように「HEP/NEP 論争」を総括し環境社会学を批判する。

「環境社会学は、社会構造や社会行為を形成する物理的、生物的要因の重要性を取り上げ、人間社会を自然界のコンテクストをもって概念化する、より全体論的なパースペクティブを目指した社会学以外のなにものでもない。しかし、環境社会学が目指した社会学や社会理論を再構築し、新しい方向を与えるという試みは、環境社会学が理論仮説やパラダイム転換の議論に終始したため、現実の環境問題を研究するうえでほとんど成果をあげることができなかった。HEP/NEP 論争が個々の環境事象に関する新たな知見にいかほど貢献したのか、また、環境問題の解決を目指す社会学的研究にどれほどの寄与をしたのかを厳しく問われなければならない。もはや環境社会学は社会学理論への主導的な影響力を失い、主流社会学の平凡な一領域に

なっている」

この批判は痛烈であり、環境社会学の弱点を裏に的確にあぶり出している。環境社会学はバトルのこの批判に真摯に答えていく課題を背負っていることは事実である。しかし、そもそも「環境社会学」が目指したもの・目指すもの・目指せるもの・目指すべきものは、バトルのいう「環境問題の解決」への実効的・即自的な「成果」「貢献」のみであったのだろうか。環境社会学が「主流社会学の一領域」に成り下がっているのは、環境社会学が「環境問題の解決」への「成果・貢献」を急ぐあまり「環境問題の社会学」に成り下がってしまったことを意味するのではないだろうか。ラディカルな牙をぬかれた環境社会学は既成社会学のパラダイムの中へ埋没していくのは当然である。「批判の学としての環境社会学」といういわば「ひらきなおり」も必要ではないか。

こうした環境社会学の「冬」の雪解けは、1980年代半ばからはじまる。それは、環境主義運動の新たな高まりとも関連している。すなわち、チェルノブイリ原子力発電所の事故や地球温暖化問題、オゾン層破壊の問題など、環境問題が局地的な範囲を超えて地球規模的な問題として関心を集めることとなったこと、それに対応して環境主義運動のより根源的な問題提起意味が再び浮上し、多くの支持を得るようになっていったことが挙げられる。

そして、環境主義運動は、改良主義的環境主義からラディカルな環境主義まで多様な形で展開されることとなる。

環境をめぐるパラダイム図式

この「HEP/NEP 論争」の背後には、環境問

題が社会的問題として浮上してきたこと、さらに根源的にはダーウィンの進化論から生態学の成立を契機とした「環境革命」が考えられる。

ここで、「環境主義」ないしは「自然観」をめぐるパラダイムの変遷を整理しまとめてみると次頁の表のようになろう。この図式は、単に環境パラダイムの歴史的変遷を説明するだけでなく、現在の多様化する環境主義を類型化する上でも有効な図式であると考えられる。

この三つのパラダイムは、歴史的時間軸の中で発展的に生起してきたものであるが、それぞれのパラダイムが時代区分的に支配していることを意味しない。つまり、「新エコロジカル・パラダイム」が登場してきたからといって、それが、「人間特例主義パラダイム」にとって変わるわけではない。むしろ三つのパラダイムが混在したなかで、それぞれの環境主義や環境運動が、それぞれの社会的地位や階級に規定されて、三つのパラダイムのどれをどの程度採用するかによって三つのパラダイム図式の内に位置付けられると捉えるべきであろう。

しかし、この三つのパラダイム区分は、「新エコロジカル・パラダイム」の側からの批判によって提示されたこともまた事実である。とするならば、環境運動を「HEP/NEP」という二つの型として位置付けることもできよう。すなわち、従来の人間中心主義的な自然保護運動では、人間は「健全な生態系に対する権利を有する」と考えられる。つまり、自然を資源として「賢明に」利用・管理し、人間の物質的利益を得る立場から自然と人間との共存を目指すのである。これに対し、ラディカルなエコロジー運動は、「生態系自体が権利を持つ」とする。したがって、前者は、人間福祉のための「効率主義」による近代を目指した環境運動であり、後者は、

環境パラダイム

仮説	DWW 西洋の支配的世界観	HEP 人間特例主義パラダイム	NEP 新エコロジカル・パラダイム
人間存在の本性	人間は地球上の他のすべての生物と根本的に異なっており、それら他の生物に対する支配権を持っている。	人間は遺伝的継承に加え（そしてそれと全く別の）文化的遺産を持つ。そしてそれゆえ、他のすべての動植物と全く異なる。	人間は（文化、技術など）例外的特徴を持っているけれども、相互に依存しつつ全地球的エコシステムに包括されている多くの種のうちの一つであることに変わりはない。
社会的因果関係	人間は自分の運命の支配者である。人間は自分の目標を選択し、そしてその目標を達成するために必要なことは何でもできるようにする。	社会的・文化的な要因（技術を含む）が人間にかかわる事柄の主要な決定因である。	人間にかかわる事柄は単に社会的・文化的要因によってのみ影響を受けるのではなく、自然の網の目の中の原因、結果、そしてフィードバックの複雑な結びつきによっても影響を受ける。それゆえ、人間の意図的活動は意図せざる結果を生む。
人間社会のコンテクスト	世界は広大であり、したがって人間のための無限の機会を提供する。	社会的・文化的な環境が人間にかかわる事柄の決定的なコンテクストであり、生物物理的環境は大部分関係がない。	人間は有限な生物物理的な環境のなかで生活し、それに依存していて、その環境が人間にかかわる事柄に対して物理的・生物学的な強い制限を課する。
人間社会に對する制約	人間の歴史は進歩の歴史である——あらゆる問題に対して解決が存在し、したがって進歩が止む必要はない。	文化は蓄積的である——したがって技術的・社会的進歩は無限に続く。そしてあらゆる社会問題を究極的に解決するであろう。	人間の発明の才とそこから生まれる力は〔自然の〕収容力の限界をしばらくの間は広げるように見えるが、生物学的法則を無効にすることはできない。

出典：キャロリン・マーチャント『ラディカルエコロジー』産業図書、p.120-121

(William R. Catton, Jr. and Riley Dunlap, "A New Ecological Paradigm for Post-Exuberant Sociology," *American Behavioral Scientist*, 24, no.1 (Sept/Oct. 1980))

「新エコロジカル・パラダイム」に立脚する環境運動である。それは、持続可能な地球生命体のための「エコロジー主義」による脱近代を旨とした環境運動といえる。

確かに、多くの環境運動は、この二つの型によって大別できようが、実際には、「新エコロジカル・パラダイム」に立脚する環境運動においても「人間中心主義」的色合いを色濃く引きづっているものもあるし、従来の「人間中心主義的」環境運動の中にも「新エコロジカル・パラダイム」への転換契機を孕んでいるものもあるといえる。

ディープ・エコロジー運動

ここでは、新エコロジカルパラダイムを牽引する思想的・哲学的支柱であるディープ・エコロジー思想について概観しておく。

ディープ・エコロジーの名称とアプローチは、ノルウェーの哲学者アルネ・ネスの「浅いエコロジー運動と、射程の長い深いエコロジー運動」(1972)という論文に由来する。ディープ・エコロジーは、西洋の支配的パラダイムに挑戦し、新しい自然科学、新しい精神・宗教的パラダイム、そして新しいエコロジカルな倫理を提示した。しかし、ディープ・エコロジーは、生産と

再生産のレベルの転換に焦点を合わせるのではなく、どちらかと言えば意識と世界観のレベルの転換に焦点を合わせる。したがって、ディープ・エコロジーは、世界の持続可能性に向かって駆動する新しい社会的、経済的な傾向を支持し、正当化する。

生態学は、相互に結び付けられた自然の網の目をなす、構成要素のすべてに等しく重要性を認める科学であるが、ディープ・エコロジーは、その生態学から出発して、有機論的民主制に進んでいく。

アルネ・ネスはディープ・エコロジーの諸原理として次の7点を挙げている。

- ① 環境の中における人間という像を退け、
全領域にわたる関係的な像を掘る
原子論的世界観から関係論的世界観への
転換の必要性を主張
- ② 生命圏平等主義
すべての生物は「生を送り開花する平等の権利」を有する
- ③ 多様性と共生の原理
「お前の生か、私の生か」ではなく「自分が生き、他者も生かさせる」というエコロジカルな原理
- ④ 階級制度に反対する姿勢
③の「多様性と共生の原理」は、支配・搾取を伴う見せかけの多様性を意味しない
- ⑤ 汚染および資源枯渇と闘う
しかし、単に「汚染および資源枯渇」のみが本質であると考え「シャロー・エコロジー」に陥ってはならない
- ⑥ 紛糾（complication）ではなく、複雑性（complexity）
人間に適用すれば、機械的な連帯では

なく有機的な連帯を目指す

「労働の断片化ではなく、労働の分担」

⑦ 地域的自律と分権化

地域の自律によるエネルギー消費・汚染の減少と意志決定の階層的な連鎖を縮小による地域の自律の強化

「生活地域主義」へ

さらに、ネスは、ディープ・エコロジーとは「自然の内に存在する人間としての経験や生態学の知識に影響を受け、強化された、規範的な、あるいはエコソフィ上の運動である」と主張する。

この「エコソフィ」とは何か。彼は、ディープ・エコロジーの今後の展開過程として、「エコロジー」「エコ・フィロソフィ」「エコソフィ」の三つの概念を区別する。「エコロジー」は、自然科学としての生態学であり、「エコ・フィロソフィ」は、エコロジーと哲学にまたがる問題の研究であり、それは専ら大学でなされる記述的な研究を指す。そして「エコソフィ」とは、彼の定義によれば、「生態圏の中の生命の諸状況によって触発された、哲学的な世界観あるいはシステム」ということになる。すなわち、それは、自らの世界観・価値観に直接かかわるものであり、われわれが巻き込まれている実際的狀況に立ち向かうときの哲学である。よって、エコソフィは、各人それぞれが持っているものであり、人間ひとりひとりの行為に直結しているものである。このように、ネスは、エコソフィを個人の実践に直接結び付く知的営みと考えている。

ディープ・エコロジーを思想的支柱としつつ展開されてきた「新エコロジカル・パラダイム」に立脚する視座は、後述のように一定の陥穽を孕みつつも、ともかく環境主義運動をラディカ

ルに牽引し続けてきたことは確かである。それは、冒頭でも触れたように、既成社会学の存立基盤を「人間特例主義的パラダイム」として根底から批判し続けるものとしてあった。「HEP/NEP 論争」は、単に社会学という学問領域を超えて、近代西洋思想総体へのラディカルなアンチテーゼとしての有効性をも孕んだものであった。

ラディカル・エコロジー

以上、ディープ・エコロジーの思想を概観してきたが、アメリカの環境史家キャロリン・マーチャントはその著作『ラディカル・エコロジー』において、環境倫理を次の三つに分類している。

- ① エゴセントリズム (自己中心主義)
- ② ホモセントリズム (エコロジー認識によって修正された人間中心主義)
- ③ エコセントリズム (生態系中心主義)

この内、①は資本主義が暗黙の前提としており、人口問題についてはマルサス主義をとる。先のパラダイム図式によれば HEP に当たるだろうか。これは、いわば主流の環境主義であり、保守的環境主義といえよう。一方、②と③は、合わせて反主流の環境主義であり、マーチャントによれば「ラディカル・エコロジー」と呼ばれる。

②のホモセントリズムは、マルクス主義やアナキズムの影響を受けた左翼のエコロジー思想の群であり、環境的公正を強調し、資本主義とマルサス主義を批判する共通点は持つものの、その展開は多様である。左翼の伝統的通弊として「自然の限界」を楽観視する傾向が強い。

これまで述べてきたディープ・エコロジーは、③のエコセントリズムに当たる。この立場が、

自然への共感ないしは畏敬を強調することは、既にみてきたところであるが、次のような批判点があるといえる。すなわち、資本主義に対する態度が曖昧であること、生態圏平等主義を説くが人間社会内部の不平等には比較的関心が薄いということである。資本制生産様式への批判精神の希薄性は、ともすれば消費重視の「心がけ」環境主義に成り下がってしまう危険性を孕んでいるものである。資本主義をどう捉えるかは環境主義にとって不可避の問題としてあると考えられる。

そして、私が考える、もう一つその限界性として挙げられることとしては、「新エコロジカル・パラダイム」が人間中心主義を批判し超克することに存立基盤を持ちながらも、新たに原初的な人間中心主義の陥穽に囚われているということには無自覚であるということである。(この点については、不十分ながらではあるが、次項において展開する)

このエコセントリズムにおける資本主義の批判の希薄さと、ホモセントリズムにおける「自然の限界」への楽観視を止揚したところに環境主義のオルタナティブな将来が展望できると、まさに私は「楽観」しているのであるが、そのジンテーゼをここで展開できるほどの力量をまだ私は持ち合わせていない。ともかくも、その位相の差こそあれ、この二つのラディカルな環境倫理がともに陥っていると思われる「人間中心主義」の存立構造を解剖することで、展望の兆しが仄みえてくることを期待しよう。

また、本来ならここで、ラディカル・エコロジーのもう一つの翼である「社会派エコロジー」についても検討するのが筋なのであるが、それは別稿に先送りにすることにする。

「自然」をどうとらえるか～「人間中心主義」の存立構造

人間中心主義をどう超克していくか、その超克は可能なのか。このことが当面私の焦眉の問題意識である。このことについて、不十分であるがしばし考えてみる。

まず、存在論的・認識論的には「自然」は所与のものとして無前提的に在るのではない。そもそも、「存在」とは、人間の認識過程を通して「ある」と認識するのであり、それは同時に「…として」認識することを意味する。つまり、意味を持たない連続体である所与たる対象を、「…として」あるいは「それ以上のなにか」として分節化ないしはゲシュタルト化することを抜きにして、人間の認識はありえない。このことから、人間は、その認識過程において常に「意味づけ」を行っているといえる。人間は意味の網の目の中に生きている「意味—内—存在」であるといえる。

われわれの「自然」に対する認識も同様である。所与としての「自然」を「…として」対象化したときにはじめて「自然」は、〈地〉から〈図〉として有意味性を帯びたものとして立ち顕れてくる。「自然」は、自然観の変換、環境パラダイムの変換に伴って歴史的に「神の造り賜うた万物としての自然」「利用・加工すべき対象としての自然」「生態系として自然」「守るべき対象としての自然」あるいは「美しい自然」等々と意味づけられてきたといえる。もちろん、これ以前に、人間と「自然」とが未分化で、自然総体を対象として認識していなかった歴史的時期があったと想定される。

このように、人間の自然認識の仕方が一つの

文化的表象であるとするならば、ディープ・エコロジーに代表される「新エコロジカル・パラダイム」の自然の読み替えも一つの文化的表象であり、それ自体決して本性（nature 自然）に根差しているものではないこともまた明らかである。つまり、「自然」も人間の文化的表象であるといえる。認識主体が人間である以上、ある意味では「原初的な人間中心主義」からは自由ではありえないのである。

もちろん、エゴエコロジー的人間中心主義には限界もあり「ヒューマニズム」という名の人間の傲慢さがあるのは確かである。ここでいう「原初的な人間中心主義」とは、こうした「ヒューマニズム」を取り除いてもなお残る「人間が認識して初めて自然は有意味性を持つ」という意味での人間中心主義を指す。この逃れがたい「人間中心主義」、しかし、とりあえずはこの現実から出発するしかあるまい。なぜならば「自然」を認識し「自然」を意味づけているのはほかならぬわれわれ人間自身なのだから。

また、自然観は歴史的・文化的産物であり、その意味で一つのイデオロギーであり、またそうなる危険性を常に孕んでいる。「新エコロジカル・パラダイム」に立脚した自然観も、このことから無縁ではありえない。そうであるならば、歴史的・文化的産物である自然観を、現実の自然状況（人間的自然をもふくめて）からの不断の捉えかえし・検証作業こそが肝要であり、その捉えかえしの視座をどこに置くかが重要なのである。この捉えかえしこそが「批判の学」の内実でもある。

ここで鍵となるのが「エコロジカル・イメージーション」であろう。

人間はその生活において自分の意志で生きているつもりでいるが、実は人間の力ではどうし

ようもない自然の構造そのものに生じる様々な変化によって支配されている。この構造とは何なのか。その本質的な構成要素はどれとどれであり、それらは相互にどのように関連しているのか。自然内部のある特定の要素（例えば、人間の営為）が、自然そのものの存続と変化にとって、どのような意味をもっているのか。その特定の要素は、自然全体にどんな影響を与え、またどんな影響を受けているのか。人間（社会）の歴史は、自然の歴史のなかでどんな位置と意味をもつのか。こうした問いを不断に問いかけ、その解答を模索しつづけることが「エコロジカル・イマジネーション」であると考え。

そのためにこそ、科学的知識の果たす役割は重要であるといえる。自然を生態系として認識できたのもわれわれ人間の「科学的」認識によるものであるし、「自然」に対する一つの科学的パラダイムの提示である。科学はわれわれ人間の認識の基盤となる多くの知識（体系）を与えてくれた。しかし、問題になるのは、知識そのものではない。知識主義は極めてイデオロギー的陥穽を孕んだものである。生態系という科学知は、われわれ人間の自然観を革新した。そうした科学知を道具として、われわれ人間はどのように「自然」を捉え、読み替え・つくり替えようとしていくのかという「エコロジカル・イマジネーション」が問われるのである。それは、もはや、科学を超えた哲学・倫理学上の問題として設定されるものかもしれない。

この意味で、ディープ・エコロジーの創始者アルネ・ネスの「エコソフィ」の提示は重要である。

ディープ・エコロジーの考え方も一つの思想として大きな牽引力があることは事実である。それは生態系そのものと、その中にいきづく人

間存在そのものも、共に生きていこうとする「共生」（決して協生ではない）の思想に根付いているからである。

これまで、近代社会においては「人間の尊厳」や「人権」は重視されてきた。それら「人権」意識もまだまだ十分に確立されているとはいいがたいが、そうした「人間の権利」（近代人権理念の最たるものとして「自然権」があるが、それも人間に限定された権利意識である）を超えて、「自然の権利」意識が求められているといえよう。それはさらに「宇宙の権利」意識へと発展していくかもしれない。ここまで来ると、形而上学あるいは宗教的な自然観と峻別できなくなってしまいかもしれない。そこにはまた、イデオロギーという陥穽が待ち受けていることも常に警戒しつづけなければならぬ。

おわりに

以上、きわめて粗削りであるが、「HEP/NEP 論争」の意味から派生して、「人間中心主義」の存立構造と「エコロジカル・イマジネーション」について述べてきたが、論稿の多くを以下に示す参考文献からの引用・援用にたよっている。また、「エコロジカル・イマジネーション」という鍵概念は、C.W. ミルズの「社会学的想像力（sociological imagination）」からの援用である。私自身、このミルズの考えも十分に咀嚼しているとはいいがたいし、環境主義思想・運動および環境社会学の歴史と現在についても不十分にしか把握していない。このような状況での論理展開となっているため、その多くは「ヒラメキ」の域をこえるものではないことは事実である。多くの事実の誤りや理論的矛盾を抱えた、正に「研究ノート」にとどまっていると思われる

る。忌憚ない批判に晒すことによって、今後の深化を期したいと考える。

《文献》

- ・ C.R. ハムフェリー, F.H. バトル『環境・エネルギー・社会』ミネルヴァ書房、1991
- ・ R.E. ダンラップ, A.G. マーティグ『現代アメリカの環境主義』ミネルヴァ書房、1993
- ・ キャロリン・マーチャント『ラディカル・エコロジー』産業図書
- ・ 戸田清「社会派エコロジーの思想」（小原秀雄監修『環境思想の系譜2 環境思想と社会』東海大学出版会 所収）
- ・ 森岡正博「ディープ・エコロジーと自然観の变革」（小原秀雄監修『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』東海大学出版会 所収）
- ・ 満田久義「自然の権利～新たな環境倫理を求めて」（『鷹陵』No.141/1994.7 佛教大学）
- ・ C.W. ミルズ『社会学的想像力』紀伊國屋書店、1965